

ハッピーハニーチャレンジを開始！

<ハッピーハニー通信 1号 2013年8月12日>

WAVOC プロジェクト「エココミュニティ・タンザニア」
をご支援いただいているみなさま

これまでの「ロバンダ村パジェロ通信」に加えて、ハッピーハニーチャレンジの近況をお伝えするメール「ハッピーハニー通信」を発行することにしました。年に数回、不定期に出していきます。村びとのチャレンジを応援してください！

●アフリカゾウとの共存に向けて

タンザニアのセレンゲティ国立公園に隣接する地域では、公園から出てくるアフリカゾウによる農作物に農民は苦しんでいます。この地域の農民たちは、ゾウを神とあがめて大切にしてきました。しかし、近年では自分たちの生活を脅かすので、ゾウと共存するのは困難になっています。

そこで、アフリカゾウと共存できるように、農民による被害対策を支援するのがハッピーハニーチャレンジです。

●ハッピーハニーチャレンジとは？

ゾウはミツバチの羽音を嫌がるといわれています。ミツバチの羽音をきくとあわてて逃げだし、さらにその時にゴロゴロと鳴きながら、他のゾウたちにもミツバチがいることを伝える習性があるそうです。これを応用して、畑の周りに養蜂箱をつるしてハチを飼ってゾウを追払うのです。うまくいけば、ハチミツから収入を得ることもできるという、一石二鳥の対策です。

ハッピーハニーチャレンジ導入までの道のり

<http://afric-africa.vis.ne.jp/projects/bee-hive001.htm>

●2012年ロムチャンガ村ニャセローリ地区で導入

試験的に100個の養蜂箱を設置したところ、畑にやってきたゾウが保護区に逃げ帰った例が観察されました。農民たちは、効果がありそうだと期待を高めています。（ロムチャンガ村への設置活動は、(特活)アフリック・アフリカの支援を受けています）

動き出したハッピーハニー・チャレンジ 盛り上がる村びとたち

<http://afric-africa.vis.ne.jp/projects/bee-hive002.htm>

●2013年はミセケ村に拡大する計画

今年は、さらに100個を、となりのミセケ村にも設置する計画です。

となりのミセケ村は、収穫期である今年の5月にゾウが数十頭入りこんできて、村人が懐中電灯で照らしたり、金属音を出したり、人の声で騒いだりして追い払おうとしても、まったく動じず、日中も畑に居座りました。そして、あげくには、2頭のメスゾウが出産までして、夕方になってようやく保護区に帰ったそうです。

ミセケ村の人びとからは、「ロムチャンガ村がミツバチでゾウを追い払ったから、ミセケ村にこんなにゾウが来てしまったんだ！」と言われてしまいました。

それが科学的に事実かどうかはわかりませんが、被害に遭っている村の苦しさはどこも同じです。今年度は、ミセケ村にも設置を進めていきます。

ミセケ村への設置活動は、W-BRIDGE 助成金の支援を受けています
W-BRIDGE <http://www.w-bridge.jp/>

●どれだけの養蜂箱が必要か？

将来的には、万里の長城のように、保護区のまわりに養蜂箱フェンスがつながって設置されれば、ゾウが入ってこなくなるのでしょうか？しかし、その長さはいったい何十km必要なのでしょう？セレンゲティ県だけでも、保護区に接する地域は100km以上になります。養蜂箱は、10mの間隔で設置するので、100個の養蜂箱でようやく1kmです。100kmをカバーするには10,000個の養蜂箱が必要という計算です。気が遠くなりそうですね・・・

そして、そんなに巣箱を設置して、ミツバチが巣をつくってくれるのかも未知数です。

このように「ハッピーハニーですべて解決！」という訳にはいかないとは思っています。それでも、農民のみなさんの不眠不休の追払い作業を、少しでも軽減できればと思っています。

●添付の写真もご覧ください。



アフリカゾウ



農民たちと



養蜂箱

本日からタンザニアに現地活動に行ってきます。
ぜひ、これからの展開をお楽しみに！

本メール「ハッピーハニー通信」は、支援いただいている方々への報告として作成しています。

送信を希望されない方は、下記アドレスまでご連絡ください。
また、送信を希望される方がおりましたら、ご連絡ください。
どなたにでも広く読んでいただきたいと思います。

「アフリカゾウ基金」では、本活動への寄付を受けてつけています。ぜひよろしくをお願いします。

<http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/index.htm>

岩井雪乃

特定非営利活動法人アフリック・アフリカ 代表理事

TEL 090-9719-5420

Eメール afric-africa@b.vis.ne.jp

WEB <http://afric-africa.vis.ne.jp/index.htm>

ミセケ村に養蜂箱を設置

<ハッピーハニー通信 2号 2014年1月13日>

●200個の養蜂箱を設置しました！

昨年は、W-BRIDGEの助成を受けて養蜂箱を200個購入し、ミセケ村の5名の畑に設置しました。

「ゾウの餌のために農業をやるようで、やる気が出なかった。けれど、養蜂箱が来たからきっと収穫できるだろう。気力がわいてきたよ！本当にありがとう！」と言ってくれました。

例年だと1月ごろは収穫期（ゾウがやってくる時期）なので、養蜂箱の威力が発揮されるころなのですが、今年は干ばつで植えた作物が枯れてしまったそうです。再度植えなおして、今は生育を待っているところです。

●養蜂箱設置研修会を開催しました。(8月)

一昨年に養蜂箱を設置したロムチャンガ村農民から、新しく設置するミセケ村農民に対して、成果と課題を共有してもらいました。

ゾウの追払いには、一定の効果を発揮していることを、ロムチャンガ農民は熱く語っていました。

ただ、蜂蜜を食べにくる新しい害獣ラーテル（ミツアナグマ）の報告もあり、課題も出てきています。効果があがるように、設置の工夫を重ねていきたいと思いません。

●被害調査からは、ミセケ村で78%の畑が被害に遭っていることがわかりました。

養蜂箱によって、少しでも被害が減るよう、農民のみなさんと現地NGOセデレックのスタッフと共に努力していきます。

●伝統弓矢大会

8月の訪問時には、「イコマ地域の伝統を学ぼう」ということで、一緒に行った日本人大学生とミセケ村のみなさんで弓矢大会を開催しました。

かつては弓矢で野生動物を狩ることが、「イコマの男の証」でした。しかし、1980年代から動物保護政策のために弓矢は全面禁止になってしまいました。それでも、みんな弓矢を使うのは大好きです。的当て大会では、みんな真剣に弓を引いており、60人ほど集まったギャラリーも大喜びでした。

●写真の説明

1 運び込まれる 200 個の養蜂箱



2 国立公園の中では、50 頭のゾウの群れを見ました。これが村に出てくるのですから困ります。



3 農民研修会



4 弓矢大会



引き続きのご支援をよろしくお願いします。

本メール「ハッピーハニー通信」は、
支援いただいている方々への報告として作成しています。
送信を希望されない方は、下記アドレスまでご連絡ください。

また、送信を希望される方がおりましたら、ご連絡ください。
どなたにでも広く読んでいただきたいです。

岩井雪乃

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

TEL 03-3203-4192, FAX 03-3203-6306

E-mail: iyukino@aoni.waseda.jp

蜂を飼うのは大変だ・・・

<ハッピーハニー通信3号 2014年4月>

みなさま、いかがお過ごしでしょうか？

タンザニアは4月は大雨季ですが、今年は洪水や大雨があった地域もありました。活動地のセレンゲティでは、ちょうどいい降雨量だったそうです。

2月に岩井が現地に行っていましたので、その報告です。

1) ミセケ村には、昨年12月に養蜂箱200個(W-BRIDGE助成金)が設置されました。蜂が入っているのは10個でいどにもかかわず、ゾウが養蜂箱の畑を避けていることが報告されています。とりあえずは、新しいものを警戒しているようです。

何年かしたらゾウが養蜂箱に慣れてしまう可能性が高いですので、今後、より多くの蜂が営巣するようになる必要があります。



養蜂箱が設置されたケベベティさんの畑

2) ロムチャンガ村の養蜂箱100個(2012年9月アフリック・アフリカ寄付)は、残念ながらあまり管理されておらず、虫に食われている箱もありました。

養蜂箱をどのように管理したらはちみつが収穫できるか、地元農民にほとんど知識がないのが原因でした。



養蜂家がハニーバジャ（ミツアナグマ）がふたを壊してしまった養蜂箱を修理している

3) そこで2月の渡航時に、隣村の養蜂家のところに、ハッピーハニー農民10名とともに研修に行ってきました。

蜂がすみつきやすい環境づくりのコツ、養蜂箱を観察する時のポイント、防護服など機材の使い方、蜂蜜の収穫方法などを指導してもらいました。

蜂に慣れていない農民にとって、蜂に刺されるのは、日本人同様に非常に恐怖です。しかし、必要に応じて養蜂箱に近づいて手入れをしなければ、蜂はいなくなってしまう。今回は、安全に蜂の世話をする方法を学ぶことができ、ハッピーハニー参加農民たちは「自分にもできそうだ!」とやる気を高めていました!がんばってほしいです!



研修農民に養蜂家が器具の説明をしているところ

4) とはいいつつも、蜂を安定して営巣させるほど養蜂を習熟するにはまだ時間がかかりそうです。そこで、ゾウの追い払いに即効性のある重要装備「大型充電式懐中電灯」を寄贈してきました(現地購入、W-BRIDGE 助成金)。

夜中にゾウがやってくると、農民たちはバケツや金属片など身近なものを使って音を出して追い払います。そして、その時に効果的なのが、強力な懐中電灯で照らす方法だと農民たちは言います。「バケツの音では止まるだけのゾウが、懐中電灯では方向転換して逃げていくんだよ!」

毎日、巨大なゾウと対峙しなければならない農民が少しでも楽になるように、との思いでした。そして、ものすごく喜ばれ、さっそく活用されています!

5) ハッピーハニーチャレンジ(養蜂箱によるゾウ追い払い)のオープニングセレモニーを開き、県の役人さんや村長さん、郡長さん、さらには村人100人を招いてランチを食べました(ヤギスープごはん)。その後、畑にみんなで行き、懐中電灯を贈呈しました。

テレビと新聞が取材するように手配して、広報も展開しました。



セレモニーでの懐中電灯の贈呈

以上です。

蜂を飼う（巣箱にいてもらう）のがこんなに難しいとは、予想外でした。はちみつを収穫できるようになるのは、まだ時間がかかるかもしれませんが、徐々に技術が向上するよう、後押ししていきたいと思えます。

引き続きのご支援をよろしく申し上げます。

本メール「ハッピーハニー通信」は、
支援いただいている方々への報告として作成しています。
送信を希望されない方は、下記アドレスまでご連絡ください。

また、送信を希望される方がおりましたら、ご連絡ください。
どなたにでも広く読んでいただきたいです。

岩井雪乃
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
TEL 03-3203-4192, FAX 03-3203-6306
E-mail: iyukino@aoni.waseda.jp

ダミアンの日本滞在記

＜ハッピーハニー通信 4号 2014年7月＞

タンザニアのパートナーNGO セデレック (SEDEREC) のダミアンは、6月28日ー7月9日まで、2週間の滞在を無事に終えて帰国しました。滞在中の活動と、彼の感想を報告します。

●900人の日本人にゾウの獣害問題を伝える

早稲田大学をはじめ、日本大学、東京外国語大学も合わせて、5回の講義・講演・シンポジウムを開催しました。約900人の日本人に、アフリカゾウによる獣害問題について知ってもらうことができました。

日本人学生にとって、ゾウは「保護すべき動物」です。地元で農民の生活が脅かされていることは想像もしていません。そんな彼らがダミアンの話から、ゾウと共生することの脅威と難しさを感じてくれました。



早稲田大学での講演

●イノシシ猟体験（千葉県鴨川市）

ダミアンに日本の獣害問題について学んでもらうことが、今回の招へいの目的の一つでした。鴨川の農村で獣害対策の電気柵や罟猟を視察し、日本でも問題が拡大していることを知ってもらいました。

「テクノロジーの国ジャパンでさえも、獣害を抑え込むことができないとは、思ってもみなかった。驚いた。日本なら素晴らしい解決策があるのだと思っていた」
「地域の特性・動物の特性に合わせて、挑戦と工夫をくり返すしかないことがわかった」



日ごろヤギやウシをさばいているので、イノシシのあつかいは慣れたもの

●上野動物園でじっくり観察

上野動物園にいるのはアジアゾウなのですが、ゾウを間近で見られることに感動していました。タンザニアでは、外国人観光客は自分の車でゾウに近寄って好きなだけ観察することができます。しかし、ダミアンたちタンザニア人は、畑にやってきたゾウを車もない状態でのんびり観察することはできません。追払うか、逃げるか、いずれにしろ生命・生活をかけて対峙することになります。ですので上野では、ゾウが餌を食べたり交尾するところを、30分以上、あきることなく観察していました。



ゾウとダミアン

●メイドカフェに感激

秋葉原にパソコンを見に行ったついでにメイドカフェに行ってみました。私たち日本メンバーも初めてです。始めは、いかがわしい所かと怪訝そうにしていたダミアンですが、メイドさんのサービスに乗せられて、帰るころには上機嫌でした。

「タンザニアでもこのビジネスはヒットするに違いない！」と、メイド服を4着も買って帰りました！（パソコンは買わずに！）

果たして、セレンゲティにメイドカフェが出現する日がくるのでしょうか？



メイドさんと記念撮影

以上です。

動物との共生のあり方について、日本事例から新しい発想も生まれたと思います。ダミアンが帰国したら、セレンゲティの農民のみなさんにたくさんのことを伝えてくれるでしょう。

一朝一夕に獣害問題は解決しませんが、セデレックとの連携を深めながら取り組んでいきます。

引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

本メール「ハッピーハニー通信」は、支援いただいている方々への報告として作成しています。

送信を希望されない方は、下記アドレスまでご連絡ください。

転送歓迎です。送信を希望される方がいらっしゃれば、ご連絡ください。どなたにでも広く読んでいただきたいと思います。

バックナンバーは、下記のサイトからどうぞ

http://www.waseda.jp/wavoc/project/honey_report1.pdf

岩井雪乃

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

TEL 03-3203-4192, FAX 03-3203-6306

E-mail: iyukino@aoni.waseda.jp

特定非営利活動法人アフリック・アフリカ(代表理事)

TEL 090-9719-5420

WEB <http://afric-africa.vis.ne.jp/index.htm>

E-mail afric-africa@b.vis.ne.jp

養蜂箱の大規模な修繕

＜ハッピーハニー通信 5号 2014年12月＞

日本は年末に向けてせわしない時期に入ってきました。
みなさま、寒さに負けていませんか？
ハッピーハニーチャレンジの近況をお伝えします。

1) ポールと屋根の交換

ハッピーハニーの養蜂箱は、つるすために2本のポールが必要でです。またハチは藪を好むので、住みやすい日陰になるように、藪ぶきの屋根もつけなくてはなりません。

このポールと屋根は、設置してから1年経つと雨と風のせいでボロボロになってしまいます。そこで、ミセケ村の養蜂箱200個について、腐ってしまったポールを交換し、屋根をふき替えました。



養蜂箱をそうじしてきれいにし、ハチが入りやすいようにする



屋根のふき替え

2) ポールは挿し木で活着するように

ポールの交換と屋根ふきかえはたいへんな作業です！離れた森から木を伐りだし、畑まで牛に引っ張らせて運びます。屋根にする草も刈って集めてこなければなりません。そして、コチンコチンの土を掘ってポールを立てる穴をあけます。1週間はかかりきりにならないとできません。

農民たちは他にもやるべき作業がたくさんあるので、この対策ばかりに時間がとられては、持続していくことができません。

そこで、少しでも作業が楽になるように、活着する性質をもつ木を植えるようにしました。うまく根づいてくれれば、そのまま木となって生育するので、交換の必要もないしハチの好む日陰も作ってくれます。

全部は無理ですが、何割かでも活着してくれるのを期待しています。

3) ダミアンは、7月に日本に来て多くの支援者と会ったことで、たいへんやる気を出しています！次々と困難が発生する現場を切り盛りして、農民を後押ししています！



ダミアンが日本で学んだことを青空集会で伝える

4) Web マガジン「SYNODOS」に掲載されました。

創られた「野生の王国」セレンゲティ
—自然保護と地域住民の受難

<http://synodos.jp/international/10478>

ハッピーハニーの活動地の背景を説明しています。アフリカの動物保護区は、白人や政府によって勝手につくられたものなのです。

以上です。

もうすぐハチミツの収穫期です。セレンゲティは例年よりも雨が少なく乾燥しているそうなのですが、果たして収穫はできるのでしょうか？ がんばってほしいです！

岩井雪乃
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
E-mail: iyukino@aoni.waseda.jp

ワイヤーフェンスはじめました

＜ハッピーハニー通信 6号 2015年7月＞

日本は梅雨ですが、セレンゲティは雨季の終わりです。本来は収穫の時期ですが、今年には雨季の始まりが遅れたため、ほとんど畑を作ることができませんでした。

作物がないのでゾウも村にはやってきません。

次の収穫までの1年、どうやって乗り切るか、村人は暗い気持ちになっています・・・それでも、ゾウ対策は少しずつ進めています！！

●養蜂箱の移設

新たな実験として、畑の脇に設置していた養蜂箱を、10mほど離れた茂みの中に移設しました。これによって、蜂の定着率が高まることが期待できます。蜂は、日陰で湿り気があり静かな場所を好む性質をもちますが、畑の脇では直射日光が当たって、どうしても巣箱内の温度が高くなってしまいう欠点があります。茂みに移してこれを改善することで、より営巣率が高まり、蜂蜜の収穫につなげる事ができると期待できます。

しかし、畑から離れしまう分、ゾウ追い払い効果が弱まってしまうことが心配です。ゾウの通り道になる茂みに置いてみていますが、果たして収穫と追い払いの結果はどのようなのでしょうか？またご報告します！



茂みに設置した養蜂箱



村の女性が作製した防護服

●防護服の製作技術指導

蜂蜜を収穫する際に必要となる防護服も課題でした。収穫は3人で実施するため、一度に3人分の防護服が必要になります。また、収穫期は同じ時期に重なるため、同時に複数のチームが収穫を行えるよう、複数セットそろえる必要があります。資金さえあれば防護服を買うことはできます。しかし、単に買って提供したのでは、長期的持続性につながりません。そこで私たちは、村の洋裁士の女性にサンプル防護服と材料を提供し、防護服を作る技術を習得してもらいました！これにより、今後は市販の価格の1/3の価格（一着2000円）で防護服を作成できます！！女性の収入向上にもつながり、一石二鳥となりました！

●ワイヤーフェンスの試験設置

養蜂箱を設置してのゾウ追い払いは、養蜂箱の購入と設置の初期費用が高く、現状では8か所の畑にしか設置できていません。また、毎年ポールと藁屋根の交換も必要で、初期だけでなく毎年メンテナンス費用もかかります。ハッピーハニーの資金だけでは、被害にあっている多くの農民の要望に応えられません。ミセケ村とロムチャンガ村だけでも200世帯以上が隣接地域で耕作していて、ゾウ被害にあっているのです。

そこで、もっと低コストで設置できる「ワイヤーフェンス」を試験的に設置することにしました。これは、畑の周りにポールを設置してワイヤーを張り巡らせる簡単な構造なので、材料費も労力も小さく抑えられます。パーキ村の1ヶ所の畑に試験的に設置しており、今のところ効果が出てゾウは入ってきていないそうです。



ワイヤーフェンスを設置する畑のとなりの
バナナ畑は、すでにゾウに食われてしまった



フェンスの材料であるワイヤー



ワイヤー設置作業



ワイヤーフェンス完成

●今年度も W-BRIDGE 助成金に採択されました！

過去2年、W-BRIDGE 助成金の支援を受けて、被害対策を進めてきました。今年度も引き続き、被害軽減と研究成果の発表に努力していきます。

W-BRIDGE <http://www.w-bridge.jp/>

ワイヤーフェンスが7村へ拡大

＜ハッピーハニー通信7号 2015年9月＞

●ワイヤーフェンスの効果を確認

「ゾウはワイヤーを恐れる」と、畑に周りにワイヤーを張って収穫に成功した村人がいました。そこで試験的に、我々のプロジェクトでも設置したところ、確かに効果があって、ワイヤーを張った畑にゾウは入りませんでした！観察していた畑の持ち主によると「鼻でワイヤーに触ると、きびすを返して保護区のほうに帰っていった」とのことでした！

我々のワイヤーフェンスは、本当にただのワイヤーです。日本の獣害対策でよく使われている電気柵ではありません。「こんな頼りないワイヤーを、ゾウが恐れるの？」と、私とパートナーNGOのセデレックは半信半疑でしたが、絶大な効果を発揮したのです。



ワイヤーフェンス。

目立つように布やペットボトルをぶら下げる



養蜂箱と組みあわせて設置する畑もある

●コストが安いので一気に拡大

そこで7月からは、村と動物保護区の境界に、直線状にワイヤーを張り巡らすプロジェクトを開始しました。ワイヤーは養蜂箱と比べると、劇的なコスト削減です！養蜂箱では、一つの畑を囲うのに少なくとも養蜂箱50個が必要で、その材料費と設置の諸費用で20万円以上かかります。それがワイヤーの場合は、20万円あれば40巻のワイヤーを買うことができ、それは16kmになります。それを、一つひとつの畑を囲うのではなく、境界線に設置してまとめて村の畑を守ります。この方法では、200世帯の畑を守ることができるのです！裨益者は1500人にもなります。

養蜂箱は3つの村でしか実施していませんでしたが、ワイヤーフェンスでは一気に7村に活動地を拡大し、1500世帯の畑を守る計画です！（図1参照。このプロジェクトは、W=BRIDGEの助成金をいただいて実施しています）



フェンスのすぐ外にはゾウ糞が！

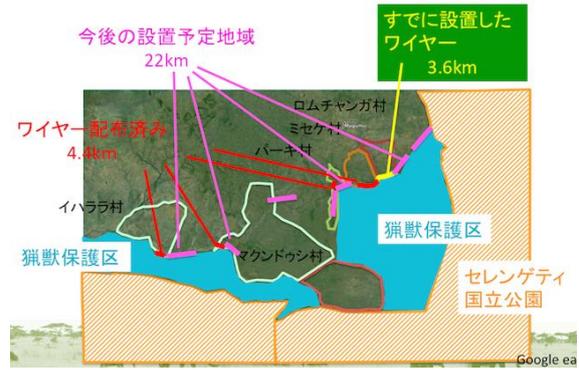


図1 ワイヤーを設置する場所の地図

●設置前の事前説明会

8月にタンザニアに行ったときは、新しくワイヤーを設置する村で事前説明会を開催してきました。1週間ほどの滞在で7つの村を訪問したので、毎日移動のハードスケジュールでした。行く先々で「日本からわざわざお客が来た！肉を食え！」と歓迎してもらい、連日、ヤギをつぶしてもらって食べました。



住民説明会。木の下が集会所



岩井からもあいさつ



集会の後はみんなで食事



ヤギ肉スープと主食のウガリ（穀物の粉をねっただんご）

●農民は農民から学ぶ

説明会でワイヤーフェンスについて説明するのは、私たちではありません。村の代表3名に、事前にすでに設置されたワイヤーを視察に行ってもらい、そこで見てきたことを報告してもらいます。「こんな細いワイヤーでゾウを追い払えるのか、私も信じられなかったが、ミセケ村の人はゾウが入らなかったと言っていた！」「保

護区に接した畑なのに、ちゃんと収穫されていたのを俺は見た！」「ワイヤーが切られてしまうこともあるから、きちんと見回って修理する必要がある」などと、話してくれます。

自分たちの仲間からの報告を聞いた村人たちは、「それならぜひやってみよう！」と主体的になります。以前、県の役人と外国 NGO の専門家が電気柵の導入について話をしにきたとき、村人は不信がって電気柵を拒否したことがありました。しかし、同じ村人が勧めるワイヤーフェンスは、積極的に挑戦する気になってくれます。

これからワイヤーを配布して、村人たちが自分で設置していきます。どうか効果がありますように！次の収穫期には、たくさん収穫してもらいたいです！



ワイヤーを視察する近隣村の農民



村の人たちに報告する女性

本メール「ハッピーハニー通信」は、
支援いただいている方々への報告として作成しています。
送信を希望されない方は、下記アドレスまでご連絡ください。
転送歓迎です。送信を希望される方がいらっしゃれば、
ご連絡ください。どなたにでも広く読んでいただきたいです。

バックナンバーは、下記のサイトからどうぞ
<http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/index.htm>

岩井雪乃
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（准教授）
E-mail: iyukino@aoni.waseda.jp

特定非営利活動法人アフリック・アフリカ（代表理事）
WEB <http://afric-africa.vis.ne.jp/index.htm>
E-mail afric-africa@b.vis.ne.jp
